

カナダ体験記

大阪大学工学部 西原 浩

「日本は、もはや極東の国ではなく、カナダの西隣にある友国である」、とは2年前の Expo 70 の Canada National Day に、カナダのトゥルー首相が送ったフランス語と英語のメッセージの一節であり、カナダ人の日本に対する意識の変化が端的にあらわれていて興味深い。われわれ日本人にとってはカナダはあまり紹介されていない国の一つである。経済大国、政治大国アメリカにかくれてしまってあまりニュースのタネにならなかったからであろう。私自身2年半ほど前にカナダ行きがきまったとき、さてカナダの首相の名は、人口は、などと自問してみたが答えられなかったのを思い出す。このたびカナダの首都オタワにある National Research Council of Canada (カナダ国立研究所、略して NRC) で2年間研究生活をする機会を与えられ、快適なカナダ生活を送ることができた。その間折にふれ体験したことをつづり、カナダ紹介の一助ともなればと願う次第である。

1. カナダの自然

カナダとアメリカとの国境の大部分は、北緯45°以北にあり、一般的にいて日本よりもかなり寒い。北緯45°にあるオタワでは、冬は11月半ば頃からはじまり、4月ごろまで残雪がみられ、5月には雪がとけだすとみるまに若葉が芽をふき、夏になる。3月から8月かけて人々は太陽を求めて、アパートのバルコニー、家の前の芝生に、あるいは近くの公園にでかけ、女性はビキニスタイルでねそべったりして、存分に太陽光線をあびる。こうして長い冬のとりかえしをするのである。夏がすぎると紅葉がはじまる。カナダの国旗に象徴されるようにカナダにはメープル(かえで)の木が実に多く、これが透きとおった赤、黄、茶、紫色に色ずき、これ

らが澄みきった青空に映えている景色はとて素晴らしい。9月10月の秋は駆足で過ぎ、寒い風が北極から吹きはじめ、11月ころからまた長い長い冬がはじまるのである。

オタワの冬の平均気温は-10.6°C、夏の平均気温は20.5°Cであり、湿度は年間を通じて40%位である。日本から行くと空気がカラッとしていて気持がよい。しかし近年北半球のあちこちでおこっている天候異変の例にもれず、カナダの天候も異常を示し、例えば一年目の冬は、今世紀最大の430cmの積雪(平年220cm)があり、ブルドーザーによる除雪費が予算をオーバーし大あわてをしたし、2年目の冬は積雪量は大したことはなかったが、いつまでも寒く昼間とけた路面の雪が夜間凍り、自動車の運転のトラブルが5月になってもあり、また恒例のチューリップフェスティバルが遅れた。

カナダは広大な国であり、横断するのに飛行機で約七時間かかる。空からみると、森林、ブッシュ、整然と区画されたトウモロコシや小麦の畑、その中に無数の大小の池や沼池が散在している。未開拓の部分が多く、したがってまた沢山の野生の動物が棲息している。町の近くでも道路上には、自動車にひかれたスカンク、たぬき、うさぎなどの動物の死骸をよくみかける。すこし山に入ると、シカ、ムース(牛と馬の中間のような動物)、クマがいる。一度ロッキー山脈に遊びにいったとき、ハイウェイのすぐ近くを、一頭の黒い大熊が歩いていた。とにかく野生動物をたのしめる土地である。

2. カナダ人と国語

カナダの人口は約2千万人で、日本の人口の約5分の1、面積は日本の約25倍である。といっても実際に人の住んでいるところはアメリカ

との国境に近い細長い帯状の地域であるが、それでもこの面積は日本の3倍位はあろう。カナダに住む民族は実に多種で多くはヨーロッパの各国からきており、それぞれがカナダの歴史を物語っている。母国語で分類すると、1961年の統計によれば、一番多いのはイギリス系で58%次にフランス系28%、西ドイツ系3%、ウクライナ、イタリア系それぞれ2%、である。その後もひきつづき移民が増加し、とくにイタリア人がめだっている。しかし人口の約85%はカナダ生れである。この中には土着先住民で北アメリカインディアン23万人、エスキモー1万4千人がおり、カナダ固有の文化といえば彼らの文化のことであり、民芸品はもっぱらカナダのお土産品である。いずれにしても日本のような単一民族の国に住みなれているわれわれから考えると、さぞかし民意の統一はむずかしいだろうと想像する。

カナダの永年懸案の公用語問題はやっと決着がつき、英語とフランス語となった。そのため公式文書、標識などは必ず両国語でかかれてあり、例えば私のいたNRCのメインストリートに面したところに立っている看板は片面には英語で他面には仏語で書いてあるし、また道路に立っている停止標識は“STOP”と“ARRET”が並べてかかれてある。2ヶ国語が公用語であること自体外国語に弱い日本人はその繁雑さを想像するだけでもうんざりするが、それに加えて2ヶ国語ゆえに費やす費用と労力は莫大なものだろうと思われる。カナダ人の大人の80%は英語を話すことができ、30%が仏語を、そして12%が両国語を自由に話せる。しかしケベック州では大半が仏語で、いつだったかモントリオールにいったとき“milk”が通じず一苦労した。親は子供に両国語をマスターさせようと幼稚園のころから考慮しているようである。公務員の高い地位につくには両国語を話せる必要があるとかで、仏語会話のクラスにかよっている要人をよくみかけた。

3. カナダ人のリクリエーション

カナダの大商業都市はモントリオール（人口

120万）とトロント（人口67万）であるが、百年以上前この両市の間にあるオタワをビクトリア女王が首都として選び、それ以来政府および大使館関係の業務のみを司る市として発展するよう努力がはらわれた³⁾。オタワ市はカナダ人が誇りとする市であり、西半球で最も美しい市という定評がある。

さてオタワ（この名はもとはインディアン種族名）の人口は約30万でありこじんまりとして静かな市である。市の北側を西から東にオタワ川がようようと流れ、リドー川とリドー運河が市の中央を南から北へと横ぎり、オタワ川に滝をつくって落ちこんでいる。これらの水のほとりは市民の憩いの場所である。土地が広大であるので街はただつ広くひろがり家と家の間隔は充分とられており、お互いはわれわれ日本人ほど他人のことを気にしないで済むようである。

カナダのもっとも象徴的な建物はオタワにあるゴシック建築式の国会議事堂であろう。カナダは英連邦に属しており、この建物もイギリスのハル市にあるものと同型だと聞いている。ここには年中観光客が絶えない。夏のシーズン中はこの前にある広場で毎朝衛兵の交替儀式があり、黒山の人だかりである。真紅の制服に、大きな黒い毛の帽子をかぶった衛兵はイギリスのバッキンガム宮殿の衛兵と全く同じ格好とのことである。観光客のためとはいえ、時代錯誤の



図1 カナダの国会議事堂
これはカナダの象徴的建物である

感はあるが楽しい光景である。

カナダ人は人なつっこく、あけっぴろげで底抜けに陽気であり、スポーツ、フェスティバルの好きな国民である。5月にあるチューリップ・フェスティバルは有名である。第2次大戦のとき連合軍のカナダ兵が勇敢にオランダに進攻し、ナチからオランダを救ったことに感謝してオランダ女王ジュリアンナが送った色とりどりのチューリップ約20万本が咲きそろう光景は実にすばらしい。このシーズンのスポーツとして、オタワではここ数年前から自転車が大変人気があり、街なかには自転車専用道路もあり若いカップルや子供連れの夫婦がサイクリングを楽しんでいる光景をよくみかける。

夏になると「暑い」そして「騒がしい」市（と彼らはいふ）をのがれて山小屋へいく。我々日本人からすればオタワ市内は、涼しい静かな場所である。車で半時間ないし1時間位の距離のところにはガティノ丘があり、ここに無数に点在する湖のほとりに土地をもち、そこに山小屋を建てている人が多い。ここで釣りをしたり、泳いだり、バーベキューをしたり（このコンロをみんなは“ヒバチ”とよんでいる）、読書したりして夏を楽しんでいる。またカヌーやボートを自家用車の上に積んできて、池に浮かべ、一日中楽しんでいるカップルをよくみかけた。

夏の終り8月末にはサマーフェスティバル（Exhibition）があり、市内の公園で種々の催し物、出店、ギャンブルの店、遊技場がひらきこの種の遊び場の少ない市民はどっと押しかける。私どもももかけてみたが、このときほどカナダ人の大群衆をみたことがなかった。この感想を翌日オフィスで話すと、ニヤリと笑って、「それでは日本にいる気分がしてうれしかったろう」とひやかされた。

冬の1月2月におこなわれるウィンターフェスティバルはみんなの楽しみである。川に張った氷をくりぬいての釣り大会、市内にある氷った運河でのスケート、はては氷塊の流れる河での寒中水泳大会等々。水さえまけばどこでもリンクができるのでスケートをする機会が多いた

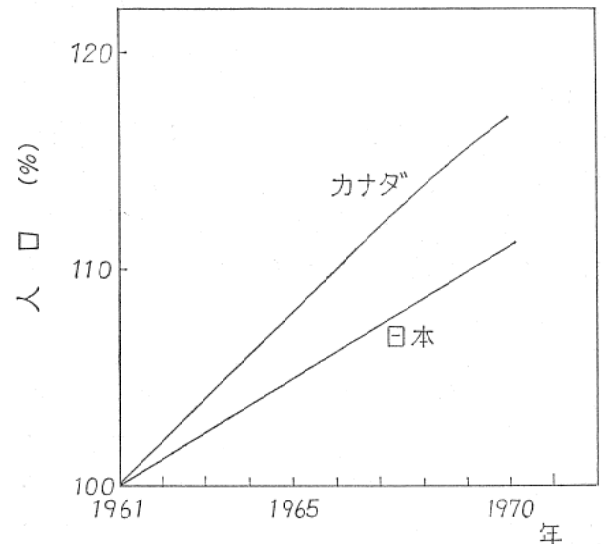


図2 両国の人口増加比較
(1961年を100としてある)

め、子供達のスケートはなかなか上手である。近年人気が出だしたものにスキドゥー（雪上オートバイ）がある。（これはカナダの発明になるものだが、日本のヤマハ製が最もよく売れている。）カナダ人の間でもっとも人気のあるスポーツは、夏はフットボール、冬はアイスホッケーである。

4. カナダ人の生活

一般のサラリーマンは朝8時半から夕方4時半まで働き、それが過ぎると一斉に自動車ですぐ帰宅する。したがってこのラッシュ時には少し交通が渋滞することがあるが、それ以外は交通マヒなどはみられない。なにかで少し長い列ができて、みんな黙って待っている。日本人のようにイライラセカセカしていないのである。家に帰った亭主は庭いじりやいわゆる日曜大工をやるのに忙しい。夕食は必ずといっていいほど家で奥さんと一緒にする。日本のように残業をし、一杯やって帰るなどはまず考えられない。そして夕食後どこかえいくことがあるときは必ずといっていいほど夫婦同伴でかける。子供は女子高校生をベビーシッターにやとって預けていく。パーティに招待されれば子供を連れていくわけにいかず、はじめは日本語しか知らない子供達をカナダの女の子にあずけていくのは不安であった。交際は夫婦単位であり、まず食事に招待することから交際ははじ

まる。このあたり日本と大いにちがうところであり、むしろ見習うべきこともあると思う。食事はまずシェリー酒（カナダのワインは実にうまい）などのワインではじまり、ごちそうがつづく。ごちそうといえば上等の肉を沢山用意することであるようだ。私のセクションのパーティなどは全部で20人位になる。夕食後8時ごろからはじまり、11時半ごろスナックがでて夜中2時ごろ解散する。これに付き合うにはかなり体力がいる。家内は日本ではこのような会合がなかったので、職場の人に会う機会がなかったが、カナダでは2年間に数回あったのですっかりみんなと顔みしりになった。カナダにいる他の日本婦人をみているとみんなのびのびとしているように見える。

カナダの住宅事情あるいは土地事情は日本と比べものにならない位よい。カナダ人が一つの住居に居住する期間は、平均5年といわれている。私どもは11階建の高層アパートの5階に住んでいたが、同じ階にはじめ住んでいた11家族が2年間のうちにすっかり入替っていた。アパートの住人はもっとひんぱんに移動するようである。それだけラクに家が見つかるのである。30~35才になればアパートの家賃位のお金を銀行に毎月返していくだけで、広い庭のついた大きな家をもてる。いくら日本の住宅事情を説明してもぴんとこないのも単に私の英語表現能力不足だけではないようである。

カナダではメインストリートの商店は、週日は夕方6時閉店（市区域外では10時頃まであいている）、日曜日は休業、したがって土曜日が買物日であり、自動車で来て2週間分位の買物をする。週日6時以後は市内の目抜通りはひっそりとして人通がすくないのにはびっくりする。オタワの人が夜の大阪梅新をみたらびっくりするであろう。

5. カナダ人のビジネス

オタワの商売人の商売態度をみていると、とても日本のビジネスにはたちうちできないと思われる。日本の商人には基本的には信用で裏付された面子というものがあ、消費者は比較的

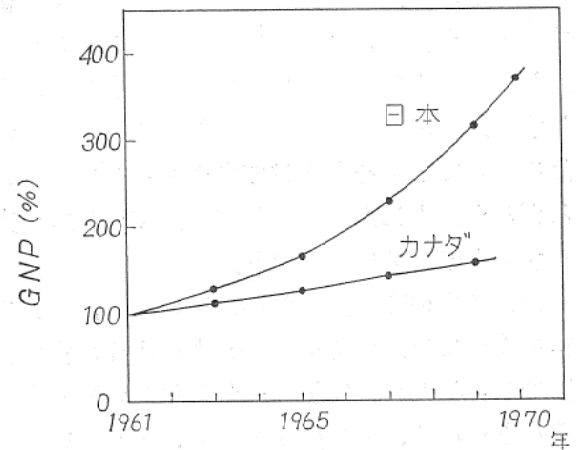


図3 両国のGNP増加比較
(1961年のGNPを100としてある)

安心して商品がかえる。しかしカナダばかりでなくアメリカの商売人にはそれが全くといっていいほどない感じがする。いかにも商売とは人をだますことであり、だまされるものが悪いといった態度である。日常生活ばかりか、NRCで実験の部品をアメリカから買った際などにもにがにがしい思いをしたことは幾度もあった。たとえば、こんなことがあった。デパートに扇風機を買いにいったが欲しいタイプはなく、2日後に来いといって、とどけてくれない。2日後にいったって持って帰って箱をあけてみるとカバーのあちこちが折れてとても新品とは思えない早速電話したが「Sorry」とは一言もいわずにただ持ってこいという。こちらも意地になり、日本商法を教育してやろうという気もあって頑張っていたら、3日ほどたってやっと取替にきた。またこんなこともあった。銀行は日本のように利子その他の計算をコンピューターをつかって計算し、通帳にタイプするシステムではない。すべて筆算し、手で通帳に書き込む、どうまちがえたか200ドルのところを250ドル請求され不審に思って問いただしてもやはり250ドルを請求する。こちらも少し急いでいたのでその額を支払ったが、一週間後にもう一度出むいて50ドルの返金を要求した。相手もミスに気がついたが、決して「Sorry」といわない。カナダ人は日常生活でたとえば人の身体にふれたときなど一日に何回となく「Sorry」を連発する。しかし責任をとらなう状況では決して「Sorry」

とはいわない。そしてあらためて調査して連絡するという。2, 3日しても連絡がないので電話してみると取りにこいという。日本ならばさしずめ、支店長とまではいなくても上司が粗品をもって現金をとどけてあやまってくるだろう。とにかく商売態度の点では日本の方がずっと優れていると思う。

ただ日本の商売熱心なのはいいが、オタワ市を歩いて気がつくのは、日本のように宣伝音楽をならしたり、宣伝カーがどなりたてるということがなく、実に静かであり、それに広告がすくなく町がきれいである。この点日本はなんとかならないものだろうか。

6. カナダの経済事情

カナダ人の平均所得は月550ドル(1970調査)である。オタワ市の各家庭には大抵1台ないし2台の車がある。これは夫婦で働くために必要なのである。しかし共稼は日本とちがって経済事情をよくするためといった緊迫したものよりもむしろ女性が外で働きたいかららしい。広い国で少数の人々がゆっくり働き、そして隣の国アメリカと同じ生活水準を保て秘訣は何かといえば、それは豊かな自然資源のおかげである。カナダは世界有数の鉱物産出国でありながらもニッケル、亜鉛、石綿は世界第1位であり、木材パルプの生産高もアメリカについて世界第2位である。うらやましいかぎりである。

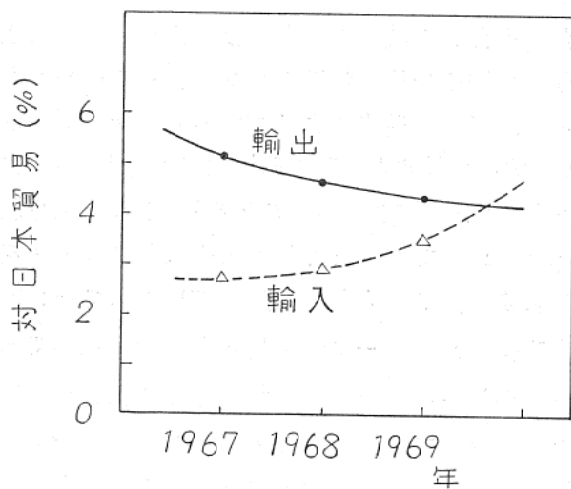


図4 カナダの対日本貿易
 ●— 全輸出に対する日本向け輸出の割合
 …△… 全輸入に対する日本からの輸入の割合

これらの自然資源を輸出して加工品を輸入する第1の輸入先は米国73%、ついでイギリス5.6%日本2.7%の順である。

カナダは1967年に百年記念祭を国を挙げておこなった。そのときにモントリオールで万国博覧会を開催したのである。その次の番として日本が1970年大阪で開催したわけで、カナダに引続いての開催国ということでカナダの日本に対する関心が高まったのだと思われる。(直接符合することではないが、だれでもがヒロヒト、ゲイシャ、ハラキリ、カラテなどの日本語を知っているにはおどろかされた)私がカナダに着いたのはまだ日本の万博の開催期間中であつたので、人に会えば必ず万博のことがたずねられた。あときの外国からの入場者にはたしかにカナダ人が多かったし、パビリオンのデザインの一等賞をもらったのもカナダだったと記憶している。このような気運がどの程度影響しているのか私ごとき素人にはよく判りかねるが一般商品にはMade in Japanの表示の入ったものが非常に多い。電気製品、たとえばラジオ、カラーTV、テープレコーダー、ステレオ、それにカメラ、時計、あるいはスプーンをはじめとする食卓用品、おもちゃ、おみやげなど。カナダの加工みやげ品はほとんど日本製である。それに自転車、そして自動車。ダットサン(こちらのブルーバード)やコロナ等は中型車としての人気は最高でこれまで人気のあったフォルクスワーゲンを追抜きそうな気配である。私の滞在の2年間のうちにも、町を走っている日本車の割合は目立って増えていた。経済的にはすっかりアメリカに依存しているカナダでは、なかなか工業が成長しない。すこし成長しはじめるとすぐアメリカの大資本家が買いあげてしまう。RCA, GE, GMの出張所があるのは当然としても、製紙工業の会社までがアメリカの資本でうごかされていると聞く。そういう訳でカナダ人はアメリカ人に対して一種の劣等感をいだいており、酷評家は「カナダはアメリカの田舎だ」とか、「アメリカの一州」だとかいっている。このようなことから、敗戦国であり、事実上アメリカの占領国であった日本の経済成

表1 カナダと日本の国情比較 (1970年度資料)^{1),2),3)}

比較事項	カナダ	日本	備考
首都の緯度	オタワ 北緯45.5°	東京 北緯36°	稚内は 北緯45.5°
面積比	25	1	
人口	21×10 ⁶	103×10 ⁶	
人口密度	2	280	平方キロ当り
G N P	845億ドル=28兆円	73兆円	1ドル=333円
1人当りGNP	133万円	71万円	1ドル=333円
1人当り年間所得	220万円	55.3万円	1ドル=333円
1人当りのエネルギー使用量比	3.1	1.0	
産業就業者比	①サービス業 32% ②製造業 22.7% ③商業 20%	① 製造業 26% ② 商業 22% ③ 農林漁業19%	
1時間当りの平均労賃	3ドル	250円	あらゆる業務を含む
1週間当りの平均労働時間	39.7	43.3	同上
失業率	5.9%	1.2%	
輸入品順位	① 機械類 ② 工業製品	① 非食品原材料 ② 鉱物性燃料	
輸出品順位	① 機械類 ② 非食品原材料	① 機械類 ② 工業製品	
日本向け輸出額 日本からの輸入額	6.2億ドル 5億ドル	— —	
国家支出 社会保障関係 教育、科学技術 国防	22.5% 10.7% 14.2%	14% 10.4% 1.1%	全国家支出に対する割合
医師1人当り人口	740	910	
死因順位	① 心臓疾患 ② ガン ③ 脳卒中	① 脳卒中 ② ガン ③ 心臓疾患	
平均寿命	男 68.7 女 75.1	男 69.3 女 74.7	
登録乗用車台数	643万	678万	
100人当りの台数	30	6.5	
事故件数	484,436	699,748	自動車による
事故死亡者数	5,318	16,278	同上
電話台数	43	19.3	100人当り
通話数	710	336	1人当り年間

長ぶり、そのアメリカに対する経済独立の度合をむしろ尊敬の念をもって見ており、新聞（オタワシブズンは夕刊だけで主に広告が多く、日本の新聞よりはるかに劣る）の社説にも「日本をみならわねばならない」などとある。しかし一般人は尊敬の念に、それを越えた妬の感情が入っていると思われることが多々あった。

以上のような国情が反映して、カナダの失業者は日本より約5倍多い5.9%である。これが現トルドー内閣の最大課題である。とくにアメリカがベトナム戦以来経済不況であることをカナダはそのまま反映している。アポロ計画の予算削減によりアメリカの技術者が職をもとめてカナダに来るにおよんで、これまでカナダの大学卒業者ならびに学位取得者がアメリカへ流れこんでいたのだが、締め出されるようになりこれが失業者数を増加させた一因でもある。このような状況を改善しようと、現政府はなんとか第2次産業をおこそうと種々方策をとりはじめている。これが後述するようにカナダの大学や研究所のアカデミックな雰囲気には政府がいらだたしさを示しはじめ、さらに干渉しはじめた原因でもある。

7. カナダの研究活動^{1),4)}

カナダの研究活動の中心はなんといってもNRCであり、国家の支出する研究費の18%を使用している。NRCは国の科学および科学技術の発展に関して責任をおう機関であり、基礎研究は研究所内でなされることは多いが、もともとカナダの産業を支えるのがそのつとめになっている。それに加えてもう一つの役割はカナダにある種々の研究グループに対してそのプロジェクトに応じて国の研究予算を分配することである。NRCの包含する研究部門には、Atlantic Regional Lab, Prairie Regional Lab, 生化学, 生物, 化学, 構築, 機械, 物理, 無線, 電気, 宇宙, 計算センターなどがある。NRC以外の研究所としてはカナダにとって欠かせない森林, 採鉱, 農業, 漁業に関するものがあり, 自然資源開発にともなう研究に力をそそいでいる。

NRCの人員はスタッフ（学位号所持者）が

約800人、技術者その他の人数をいれると総計3000人以上になるであろう。これらの部門や研究室はカナダ全土に散在しているわけであるがその中心はオタワのNRCである。ここも2つに分かれていて、サセックス通に面し、北側はオタワ川を背にしている古めかしい建物と、すこし市のはずれにある広大な敷地内にある新しい建物とがある。NRCの設立は1916年で1967年のカナダ百年祭のときにNRCも50年祭を盛大にやったとのことであり、前者の3階建の建物も50年の歴史のにおいがする。私が属していたのは物理部の中の Laser and Plasma Physics section でこの建物の3階の東端にある。部屋の窓から美しい水のオタワ川がみえ、秋には色とりどりの紅葉がみられ、今も目をとじると、その景色があたりと浮んでくる。カナダの一般の家屋は日本のとちがって大抵地下室があり、これは洗濯機、暖房設備の置き場にもなりあるいは冬の子供の遊び場にもなっている。日本のような下水設備の悪いしかも湿気の多いところではまねはできないであろう。このNRCの建物も実に複雑な地下室、地下廊下がありそこに高価な大仕掛の実験装置が並んでいる。建物が古めかしいのはいいが、たとえばエレベーターが旧式そのもの。ドアが格子戸で手動操作式である。朝、昼などの利用の多いときは、カナダ政府のマークの入ったユニホームを着たエレベーターボーイがぎょうぎょうしく戸を開閉するのがみられる。いかにもカナダらしいのんびりとした情景である。この建物内ではおもに Pure Physics, Biochemistry, Biology が研究室をもち、Physics では分光学の Section が世界的に有名であり、ここにいる Dr. Herzberg が昨年度のノーベル化学賞を授与された。おかげでその祝賀会ではじめてノーベル賞なるものを拝見させてもらった。カナダの数少ない発明品の中に大気圧で動作する炭酸ガスレーザーがあり、われわれのグループはこの改良型で世界最高のピークパワー3GWの大出力レーザーを製作し、今年の5月にモンリオールで行なわれた量子エレクトロニクス国際会議で多大の注目をあびた。この型のレーザーが現政府から

の援助をえて、2つの会社で製作され売り出されている。先に私はカナダ人はのんびりと生活し、仕事でも残業するような人はいないと書いたが、これはNRCの研究者にはあてはまらない。彼らは実に多くの時間を研究に費やす。週末がはじまる金曜日の夕方はパーティなどによばれて早く帰る。土曜日は休息し買物に家族ずれででかける。そして日曜日の午前中は子供づれで教会にいき、午後からは研究室にでてくる。また週日も夕方5時半ごろには一旦帰宅し家族と夕食をすませ、8時ごろにまたでてきて12時すぎまで仕事をしているのをよくみかけた。私のセクションではパーマネントのスタッフ3名、私のような客員研究員が常に2、3名、それに技術者が5名といった規模で政府から受ける年間予算は人件費を除いて約10万ドル、日本の大学の一研究室の予算に比べて約一桁多い。

研究者の国籍はバラエティに富んでおり、ロシア、ポーランドを含めて世界各国からきている。カナダはすぐれた研究所の門戸を世界の研究者に開き、彼らを招いて自国のために研究してもらっている格好である。そしてアカデミッ

クのレベルでは世界一流であるが、残念なことにカナダには工業がそれほど発達していないので、NRCの成果が一般人の生活向上に還元されない。それでいて税金を払ってNRCをサポートせねばならない。といったところが最近のNRC改組議論の論点であり、これに対してDr. Herzberg はじめ多くの科学者は反対しているが、どうも来年あたりから改組がはじまるらしい。改組したからといってすぐに工業が栄えるわけでもあるまい。すこし近視眼的すぎるきらいがあり、世界の学問のためには惜しいことである。

もう一つNRCの大きな役割は National Science Library を運営し、また Technical Information Service の業務を司ることである。ここには世界のあらゆる種類の科学専門雑誌約4万種、図書は約80万冊が集められ、多くの文献はマイクロフィルムに取められている。また雑誌名、発行年などはすべてコンピューターに記憶されており利用の便はきわめてよい。その上、24時間年中無休なので私は大いにこの図書館を利用させてもらった。

表2 両国の物価比較 (1972年1月ごろ)

比較品物	カナダ		日本	
	価格(ドル)	等価労働期間	価格(円)	等価労働期間
ミルク (1.8ℓ)	0.36	0.1時間	270	0.33時間
牛肉 (1kg)	2.60	0.7時間	2,000	2.4 時間
紳士ズボン	22	5.8時間	5,200	6.4 時間
紳士靴	32	8.5時間	5,000	6.2 時間
25インチ カラーTV	650	4.3週	15万	4.6 週
カメラ (ニコマートFTN 50F2)	390	2.6週	48,700	1.5 週
自動車 (ブルーバードデラックス)	2,700	18 週	65万	20 週

註) 等価労働期間算出には次の労働者をえらんだ。

- 1) カナダ⁷⁾ : 経験5年の30才男子銀行員,
週給152ドル, 1週40時間勤務, 1時間当り3.8ドル
- 2) 日本⁸⁾ : 金融保険業にたずさわる30~34才(平均32.4才)の男子, 経験年数平均9.3年。月給13.5万円(ボーナスその他含むが, 超勤手当は含まない), 週40時間勤務, 月166時間勤務, 週給3.24万円, 1時間当り810円

8. 日本に帰って

広大な北アメリカ大陸を飛行機と自動車で横断し2年ぶりに日本に帰ってきて感じたことは第1にやはり人が多いということである。羽田空港の人と車、それに軒をくっつけて並ぶ家々。第2に日本の社会の人間関係の粘っこさとか相手のことを意識してイライラしていることがあまりにも多いということである。いくら国柄が違うとはいえ、同じ地球上に住んでいて、あちらはゆったりとした生活、こちらはあくせくした生活、はたしてこの差をちぢめることができるのだろうか。しかし別の見方をすれば、日本人は種々の悪条件の中でとにかくも工面してよくやっている大した民族だと驚嘆させられる。だからやる気になれば日本人は人口過密問題も公害問題もきっと立派に解決することができるにちがいない。いまほど日本民族の真の知恵が問われたことがなかったのではないだろうかなどと考える毎日である。

おわりに

両国の国情や生活状況の比較のため、図2、3、4、表1、2を用意した。図2、3、4は説明を要しないであろう。表1、2の比較対象事項についてはできるだけあいまいさの少ないものを選んだが、そのためバランスがあまりよくとれていなくて恐縮である。両国の物価の比

較はその基準のとり方がむずかしい。表2では両国の金融業にたずさわっている30才位の男子を基準にしたが、これでも両国の社会における金融業のランクは同等ではなく（おそらく日本の方が上であろう）、正確な比較とはいえない。しかし当らずとも遠からずと願いたい。注目すべきことは、日本は食費が高いこと、および日本製のカラーTVや自動車などで、1ドルを300円として計算して日本での価格の方が安くみえるものでも、等価労働時間になおすとやはり日本の方が高いということであり、これはとりまなおさず日本人の賃金が低いということ、それだけ暮しにくいということの意味する。これは私の体験と一致する。

2年間のカナダ滞在で体験したものは一国のほんの一部である。この記事の中に間違いが少ないことを願っている。

参考文献

- 1) "Canada Year Book 1970-71,"
Dominion Bureau of Statistics, Ottawa
- 2) "Canada 1972," Statistics Canada
- 3) R. Haig, "Ottawa, City of the Big Ears,"
1970
- 4) "NRCL-71," National Research Council of
Canada
- 5) "朝日年鑑1972", 朝日新聞社
- 6) "46年賃金構造基本統計調査報告", 労働大臣
官房
- 7) "The Gazette" (トロント新聞) 1972年1月

(昭和47年9月15日記)